劣等意識を除去し、意欲的に活動する子の育成

—— Ｔ・Ｏ児の数学科・音楽科の指導から ——

岸　本　陽　子

1　対象児のプロフィール

生徒名　　Ｔ・Ｏ(男)　昭和４５年５月１８日生（中学部２年）　ＩＱ３８（ＷＩＳＣ）

本校小学部より入学し現在に至る　　ダウン症

(1)　一般的特性

喜怒哀楽の感情がはげしく、それによって学習も左右されることが大きい。女性的言動をとることによって関心をひこうとする。言語は不明瞭であるが話そうとする。

運動能力・作業能力・基本的生活習慣には特に大きな問題はないが、国語的・数的な知的能力に落ち込みがみられる。

(2)　問題点と研究に取り上げた理由

男子３名、女子３名（１年生２名、２年生４名）の中度～軽度の能力であるクラス集団の中にあって、特に国語的・数的な知的能力に他の生徒より落ち込みがあり、それが本生徒の劣等意識を強くしている。少しでも困難な課題に直面するとすぐあきらめたり、頼ろうとしたり、逃避の言動をとろうとする。

この劣等意識を除去・改善し、意欲的に活動する姿をもてたら、また、そばで励ましたり賞賛したりしながら取り組ませることによって、根気が続くようになったらと思い、研究と取り組んだ。

2　個人目標の設定と研究方法

(1)　個人目標の設定

研究の取り組みにあたって、数体験を多くもつ取り組みが、Ｔ・Ｏ児にとっては概念獲得に効果的に働くのではないかという仮説をたて、「少しぐらい難しい課題でも頑張って取り組む」という個人目標を設定した。

(2)　研究の方法

中学部の数学科では「生きて働く力」となり得る能力の育成という立場から、金銭の取り扱いと時計の使用を中心に学習している。Ｔ・Ｏ児の数的な能力の実態からみると、金銭・時計の学習と取り組むには大変無理があり、もっと基礎的な段階での対応・操作の指導が必要だと思う。しかし、Ｔ・Ｏ児が知的学習を避けて通るのでなく、自分もみんなと学習しているという雰囲気の中で意欲的に物事に取り組んでいくような手だてを工夫し、「生きて働く力」を定着させていきたいと考えた。そこで、一般的にダウン症児が好むといわれる音楽活動に「数」を結びつけて、数と音楽を相互に作用させていくことから出発し、研究と取り組んだ。

中学部Ａ組担任

3　授業の取り組みと指導の手だて

(1)　授業の構成

次表のように、数が歌詞になっている曲を3曲選び、指遊びや絵を見たりしながら、数と歌を結びつけて繰り返し繰り返し指導した。

① 数唱と指の対応……「のねずみのうた」（１～５）
「一本橋のうた」（１～１０）
（強化の手だて ⟶歌う順序を替える）

② 数唱と数字の対応……「数字のうた」（１～１０）
（強化の手だて ⟶歌う順序を替える
⟶絵カードを次第にはずし取っていく）

③ 数唱と指と数字の対応
……「数字のうた」に指も加える
（強化の手だて ⟶歌う順序を替える）

①②③ いろいろな数体験に生かしていく

いっぴきののねずみが　あなぐらをぬけだして
チュチュ……　おはなししてるー

にーひきののねずみが　あなぐらをぬけだして

⋮　⋮

すうじのいちは　なーに　こうばのえんとーつ
すうじのにーは　なーに　おいけのがちょう

(2)　指導の手だて

Ｔ・Ｏ児の数の実態はとみると次の通りである。

①　「１つ」「２つ」までの概念がかろうじてわかる。

②　１０までの数唱は何とか唱えることはできるが、１対１対応が確実ではない。

③　視写なら１０までは書けるが、「読む」「書く」が一致しているのは「１」のみである。

この実態から考えて、Ｔ・Ｏ児の数能力を高めるというより、少しぐらい難しくても頑張るという活動態度の育成にまず重点をおいて、次のような手だてを考え、取り組みの中で考慮した。

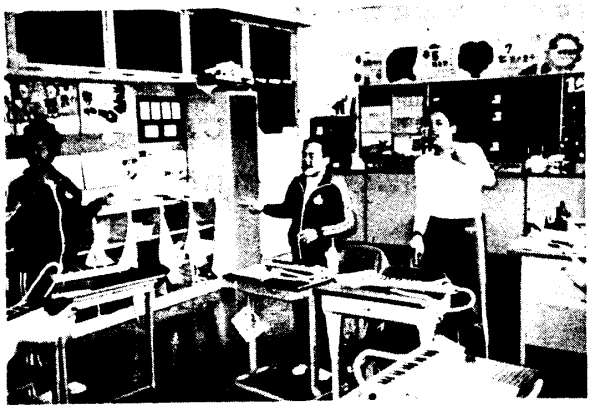
①　失敗したり間違ったりしても、萎縮しないようみんなで励ましていく。

②　教師の励ましや賞賛の言葉かけを多くし、自信をもたせるようにする。

③　知っている数の範囲内で、喜びや自信のもてる場面もつくり、興味・関心につないで持続をはかる。

このようにして、Ｔ・Ｏ児の得意な音楽的な表現と数体験を結びつけて数の概念化をはかること、教師や友だちに励まされ、安定した心理的環境を構成する中で、Ｔ・Ｏ児が多少抵抗のある課題でもがんばって挑戦しようとする姿勢を形成していこうと考えたのである。

4　指導実践例



事例１　指遊び歌の指導を通して

「のねずみのうた」「一本橋のうた」とも繰り返して指導した結果、次のことが考察できた。

① 順序通りに歌っていけば、５までであれば確実に歌詞の数と指の数は正しく対応できる。しかし６以上はまだ確実に指が出せない。

② 歌う順序をかえると「１」「２」「３」は指を正しく出せるが４以上はできない。

③ まねてなら１０までをすぐ指で表すことはできる。

事例２　「数字のうた」の指導を通して

① まず最初は、絵数字のカードを１から順に並べて提示し順に歌わせたら、すぐ覚えて歌った。

② そこで、提示したまま、歌う順をかえて（こちらで指定して）歌わせたら、これでは「１」だけしか歌えなかった。

③ そこで今度は、歌をこちらが全部歌って（順不同で）Ｔ・Ｏ児にカードを見つけさせるようにしたら簡単にどれも見つけた。

④ ①と③も繰り返しながら②を時々してみる、といった過程を経て、現段階で②をすると、「１」「２」「３」「５」であれば歌えるようになった。

⑤ また、現段階で絵数字のカードの助けが無くても歌えるのは、やはり「１」「２」「３」「５」のうたである。

事例３　給食当番時の副食の配ぜんを通して「３こ」の指導

一学期半ばまでは、食器の中に「いち、に、さん」を数唱させながら、シューマイやウインナーのような副食の「３つ」までを入れさせることも試みた。すると「１」から「２」、「２」から「３」と数えるまでにつまみ入れる『時間』がかかり、数が記憶できず効果的ではなかった。そこで、「のねずみのうた」や「一本橋のうた」でする「３びきや」「３ぼん」の指の一本ずつに対応させていき、だしている指が「さん」であることも歌を通して意識づけるようにした。

このように手だてをかえたら、これは容易に受け入れられ喜んでするようになった。そして、何度も経験させるうちに「３つ」が自然に獲得されていった。「のねずみのうた」でも「３びき」のときは意気揚々として声を出して歌うなど、Ｔ・Ｏ児には少し難しいと思えた課題をこなして、自信を高めていった。「３つ」がわかると数字に対する関心も高まり、この頃から「３」が自由に読めたり書けたりするようになった。そして「数字のうた」を歌うときも自信をもって歌うなどの変化もみられた。

事例4　学級のカレンダー係をつとめさせることを通して

① 数の概念がほんのわずかしか獲得されていないT・O児が自信をもって取りくめるように、横に日めくりカレンダーを準備し、月・日を黒板の端に視写させていくようにした。

毎朝、学校に来るなり昨日のカレンダーを破り、その日のこよみを抵抗なく書き移す姿が見られた。

② 書いたものを朝の会で「今日は○月○日です」と発表させていくようにした。

読めない数字には、T・O児が立ち往生する前に「のねずみのうた」「一本橋のうた」、「数字のうた」をヒントとして引用し、自信をもって発表できるようにしむけていった。2けたの日は例えば13日を「いち、さん」としか読めないまでも数字に対する意識づけにはプラスに働いている。

5　考察と反省

T・O児の好きな音楽活動を通して、数的な能力の伸長と結びつけ、難しい課題と取り組むという目標は、4月当初と比べると次のような変化を認めた。

① 「3つ」までの概念が獲得できた。

② 1対1対応が確実になった。

③ 「1」「2」「3」「5」の読み書きが自由になった。

その他にも、教室での余暇を利用して数字の練習ノート何ページ分も書くというような意欲的な活動となってあらわれた。能力はどうであれ、興味をもったということが劣等意識の除去にもつながっているようにも思われる。このような状態のT・O児に対して我々は次のような手だてで応えていった。

① 数学科の中では、T・O児が獲得している数の範囲で活やくできる場面を多く取り入れるようにした。特に「3」については自信をもってこたえられるように配慮した。

② 教室環境を整えるとともに、友だち同志で励ましていくような態度を習慣づけるよう努めた。

このようにして、成功経験と、数への興味と、クラス環境とがあいまって、次第に劣等意識もうすれ、以前のように、数学科の時間になると最初から小さくなっていたり、先入観でもってあきらめるという姿勢はほとんどみかけなくなってきた。逆に少しぐらい難しい課題でも自信をもって発表するというような意欲的な態度がしばしばみられるようになった。

6　今後の課題

数に興味をもってきている今、ほんとうに数概念獲得のプロセスはこれでよいのか、もっと効果的に獲得できる方法はないのか、T・O児の数への取りくみ姿勢に応えるべく検討をしていく時期にきていると思われる。